

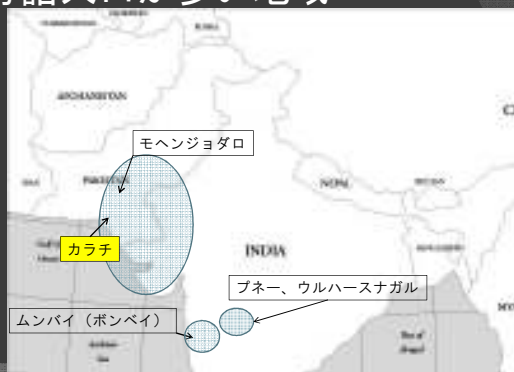
スィンディー語： 母なる川インダスが育んだ ことば

東京外国語大学語学研究所公開講座
2011年10月11日
大学院総合国際学研究院
萬宮 健策

スィンディー語概略

- インド、パキスタンを中心に3000万人程度の母語人口を有する現代インド・アーリヤ諸語
- →パキスタンのスィンド州（南東部に位置する）の公用語の1つ
- →インドの「重要言語」の1つ（1965年制定（憲法第8別表））
- 豊富な子音音素
- 口語における、人称接尾辞の多用
- 多重使役動詞
- 能格言語
- 2種類の文字を使って表記

母語人口が多い地域





豊富な子音音素

- 4種の入破音、3種の反舌音、5種の鼻子音
- →ウルドゥー語では、入破音なし、3種の反舌音、2種の鼻子音
- 例) [bi] (～も) と、[bi:] (別の(女性形))
- 例) ナ行のニ[ni]と、ニヤ行のニ[ni]
- 例) [ka]と、[k^ha]
- [da]と、[d^ha]、[ɖa]、[ɖ^ha]、[ɖa]

- 参考：母音
- 長母音 a: i: u: e: o: æ: ɔ: それぞれの鼻音化音
- 短母音 ə i u (e) (o) それぞれの鼻音化音

人称接尾辞の多用

- 親族名称
- 例) 私の息子 mūhijo puṭu / puṭumi
- mūhijo puṭa / puṭami
- 動詞 (私は彼(彼女)に言った)
- mū huna k^he cayo. cayomāsi. / mū cayo.
- 後置詞 (私は彼(彼女)に質問した)
- mū huna k^hā sawālu kayo. mū k^hāsi sawālu kayo.

多重使役動詞

- $mũ$ $mānī$ $k^{h}ād^{h}ī$.
私 (1sg. obl) 食事(fem.n.) 食べた (past fem.sg)
- $mũ$ $huna$ $k^{h}e$ $mānī$ $k^{h}ārāī$.
私 (obl) 彼 (obl) に 食事(fem.n.) (直接) 食べさせた (past fem.sg.)
- $mũ$ $huna$ $k^{h}e$ $huna$ $sā$ $mānī$ $k^{h}ārārāī$.
私 (obl) 彼 (obl) に 彼 (obl) よって 食事(fem.n.) (仲介者を介して) 食べさせた (past fem.sg.)
- $mũ$ $huna$ $k^{h}e$ $huna$ $sā$ $mānī$ $k^{h}ārārārāī$.
私 (obl) 彼 (obl) に 彼 (obl) よって 食事(fem.n.) (仲介者を2名介して) 食べさせた (past fem.sg.)

能格

- 意味上の主語に能格マーカーなし
- $mā$ $hīu$ $kitābu$ $paṛ^{h}ā$ $t^{h}o$.
I(1sg. nom.) this(mas.nom.) book(mas.nom.sg) read(1sg. imperfect) am(mas. 1sg. cop. present)
- $mũ$ $hīu$ $kitābu$ $paṛ^{h}iyo$.
I(1sg. obl.) this(mas. nom.) book(mas. nom. sg) read (mas. 3sg. perfect)
- $mũ$ $hī$ $kitāba$ $paṛ^{h}iyā$.
I(1sg. obl.) these(mas. nom.) books(mas. nom. pl) read (mas. 3pl. perfect)

近隣言語との差

- これは 何 ですか？
- $hīu$ $c^{h}ā$ $āhe?$ (スィンディー語)
 ye $kyā$ $hai?$ (ウルドゥー語)
 e ki $e?$ (パンジャービー語)
- これは 私の 本 です。
 $hīu$ $mūhijo$ $kitābu$ $āhe$.
 ye $merī$ $kitāb$ hai .
 e $merī$ $kitāb$ e .

2種類の文字を併用

- パキスタンでは、ナスフ体アラビア文字
- インドでは、ナスフ体アラビア文字に加え、デーヴァナーガリー文字を併用
- مون کي توهان سان ملي ڏاڍي خوشي ٿي.
- मूँखे तव्हाँ साँ मिली द्वाढी खुशुशी थी।
- mū k^he tav^hã sã mili dāḍhī xuššī t^hī.
- 「お会いできてうれしいです」

2種類の文字を併用

- 1852年 正書法確立（アラビア文字の採用）
- 1947年 インド、パキスタン分離独立
- ヒンドゥー教徒がインド側へ移住開始
- インド政府が、デーヴァナーガリー文字使用を推奨
- 1965年 インドで「重要言語」指定（インド憲法第8別表）
- 1971年 言語紛争の結果、スィンド州（パキスタン）で公用語の地位獲得

文字をめぐる問題

- アラビア文字を使うのか、デーヴァナーガリー文字を使うのか
- ムスリム＝アラビア文字、ヒンドゥー＝デーヴァナーガリー文字という分類
- アラビア文字で説明されているヒンドゥー寺院の概略
- アラビア文字にアイデンティティを求めるヒンドゥー教徒
- 合理的でない文字体系（帯気音、反舌音）

インドにおけるスインディー

- 言語州(linguistic state)という州編成
- 例) グジャラート州のグジャラート語
- 西ベンガル州のベンガル語

- 行き場所がないスインディー（ほぼ全員が分離独立前後にインド側に移住したヒンドゥー教徒）：全国各地に分散
- グジャラート州、マハーラーシュトラ州に比較的集中
- 使う場所：家庭内に限定（ヒンディーや英語、各州の公用語、その次）

パキスタンにおけるスインディー

- 国語ウルドゥーとの関係
- 多民族多言語国家パキスタンにおける国語と地方語
- ウルドゥー＝インド亜大陸におけるムスリム文化の象徴
- 1947年8月のインド、パキスタン分離独立
- 1971年の「言語紛争」を経て州公用語の地位を獲得（「スインディー文化の中心」という誇り。現在は形骸化（？））

スインディー文学

- 17世紀後半から19世紀半ばまでに「黄金期」を迎えた口承文学の伝統。正書法確立後に記録
- Shah Abdul Latif Bhitai (1689-1752)
- Sachal Sarmast (1739-1829)
- Sami (1743-1850)

- Shaikh Ayaz, Tajal Bewas

スィンディー詩の例

- سائينر! سدائين مٿي ڪرين سنڌ سڪار
- مٺا، دوست، دلدار آڻو سڀ آباد ڪرين
- (شاه عبداللطيف ڀٽائي)

- saaiiNmi sadaaiiN mathe kariN sindhu sukaar
- miTThaa dosta dildaara aao sabhu aabaadi kariN

自らの文化・言語を保護・保持する

- 「家庭内言語」になる
- 「スィンディー語ができること」が持つ意味を見いだせない
- 南アジアにおける英語の重要性
- スィンディー語で書かない作家
- →より多くの読者を得るためには、ウルドゥー語、ヒンディー語、英語で書く
- 焦り、悲壮感はあまりない？現実を直視
